FIELD NOTE

no. 70 Aug.

特集

涼む

9周年企画

フィールドとフィールド・ノートの記憶

FIELD NOTE 2011.

表紙写真：石川あすか
ギャラリー写真：﨑田史浩

『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン　森の生活』の初版本扉に、ソローの妹、ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow　Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。

06 特集 涼む

08 まちをはなれて感じる涼
10 都留の湧水小紀行
12 滝へ行く
14 古民家の涼
16 初夏の公園 ～木陰をさがす～
18 涼み終えて

20 フィールド・ミュージアムのたのしみ
第14回　その事象に立ち会うということ
身の丈にあった技で自然と接する
24 ひろいもの　第1回 シラカシの葉
26 いちまいの写真から
28 商店街と私
30 「つくる」をみつめる 第1篇
夢中になるものづくり
32 ジェンギズ窯を訪ねて
34 9周年企画
フィールドとフィールド・ノートの記憶

38 フィールド暦
40 大桑山だより ―うら山図鑑 第11弾「両生類」
42 Field・Note News
46 編集後記

FIELD NOTE

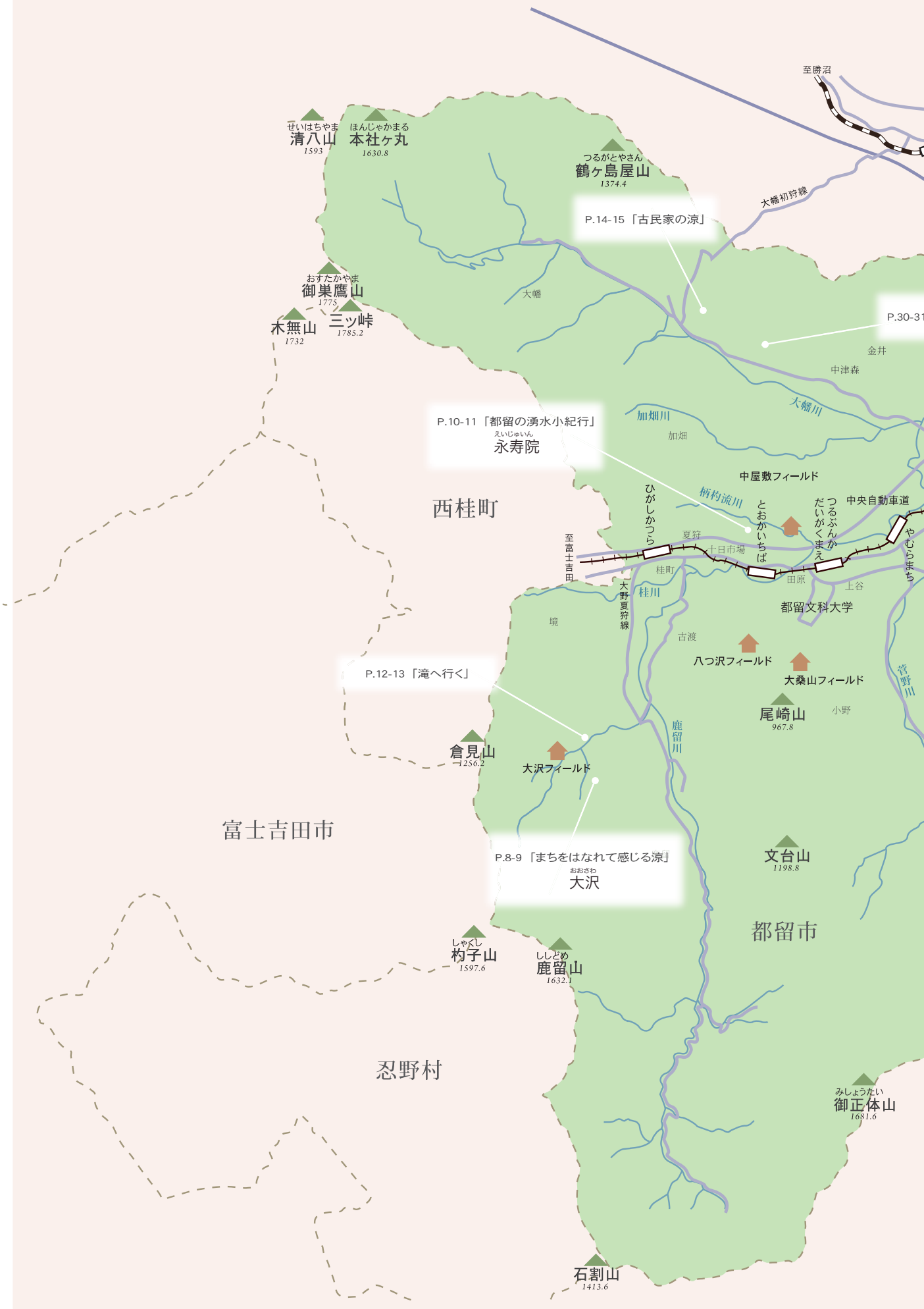
今号で編集部員が訪ねた取材先を
地図にまとめました。索引がわり
にもご利用ください。

「夢中になるものづくり」

P.26-27「いちまいの写真から」
さいりょうじ
西涼寺

P.28-29「商店街と私」
さんちょう
三町商店街

P.32-33「陶芸」
ジェンギズ窯


至勝沼
せいはちやま
清八山
1593
ほんじゃかまる
本社ヶ丸
1630.8
つるがとやさん
鶴ヶ島屋山
1374.4
大幡初狩線
P.14-15「古民家の涼」
おすたかやま
御巣鷹山
1775
木無山
1732
三ッ峠
1785.2
大幡
P.30-31
金井
中津森
大幡川
加畑川
加畑
P.10-11「都留の湧水小紀行」
えいじゅいん
永寿院
西桂町
中屋敷フィールド
柄杓流川
ひがしかつら
とおかいちば
つるぶんか
だいがくまえ
中央自動車道
やむらまち
至富士吉田
夏狩
十日市場
桂町
田原
上谷
大野夏狩線
桂川
都留文科大学
境
古渡
八つ沢フィールド
大桑山フィールド
菅野川
P.12-13「滝へ行く」
尾崎山
967.8
小野
鹿留川
倉見山
1256.2
大沢フィールド
富士吉田市
P.8-9「まちをはなれて感じる涼」
おおさわ
大沢
文台山
1198.8
都留市
しゃくし
杓子山
1597.6
ししどめ
鹿留山
1632.1
忍野村
みしょうたい
御正体山
1681.6
石割山
1413.6

特集

涼む

今年もあつい 夏が来た
強い日差しが照りつける
吹いてくる風も 何だかなまぬるい

あつさから逃れて部屋に帰ると
すぐにクーラー 扇風機をつけたくなる
でも リモコンを握る手を少し止めて考える

クーラーも 扇風機もないころって
いったいどうやって涼んでいたんだろう
あつさをしのいでいたんだろう

便利なものがたくさんあって
頼ってしまえば すぐに涼しくなれるけど
そうじゃない涼みかたもたくさんあるはず

昔のくらしから
自然あふれる野山から
私たちがみつけた「涼」をお届けします

まちをはなれて感じる涼

私は昔からあつさが苦手で、毎年夏が来ると、「今年はどうやって乗り切ろうか」と考える。今年はとくに、例年に比べて早い時期から夏日が続いている。こうもあつい日が続くと、何をやるにも億劫になってしまう。それでも今年はいかに電気を使わず過ごそうかと考えていた時ふと、以前釣りに行った都留市の大沢や大旅沢のことを思い出した。今年は自然のなかで涼んでみよう。そう思い、都留市鹿留の大沢に二度、足を運んだ。

持田睦乃（社会学科3年）＝文・写真

6月26日（日）、朝8時ころに大学を出発し、大沢へ向かった。本学から車で15分ほどのところにある大沢には以前69号の取材をかねて釣りに行ったことがある。小さな沢で、水の量も大きな川に比べて少ないが、風景を楽しみながらゆっくりするにはちょうどいい場所だ。

この日は日差しこそ強くないものの、都留のまちは朝から蒸し暑かった。大沢に到着し車を降りると、まず地面の柔らかさを感じる。沢の近くにあるキャンプ場の駐車場なのだが、コンクリートが敷かれていないためか照り返しも強くなく、土がむき出しの地面が、地上の熱を少しだけ和らげてくれているようだった。

沢のあたりでは、以前釣りに来た時と比べて軽装だったこともあり、空気の冷たさをいっそう感じた。気温がそれほど上がっていなかったので、少し肌寒いくらいだ。水に手を浸けてみると、思っていたよりずっと冷たくて、手を出してもしばらくひんやりとした冷たさが手に残っていて心地いい。もっとあつい日に来たら、よりこの涼しさを楽しめるだろうと思った。

◆

それから2週間後の7月10日（日）再び大沢へ涼を求めて向かった。日差しが強く、気温も高い。絶好の涼み日和だ。前回と同じく、駐車場に降りるとその地面の柔らかさに驚いてしまった。なぜこんなにも柔らかく感じるのだろうと不思議に思って足元を見てみると、小さな雑草が点々と生えているのがわかる。雑草がクッションになって、柔らかさを感じさせているのかもしれない。

沢まで降りていくと、駐車場との気温差を顕著に感じた。水量は変わらず少ないが、やはり冷たいのだろう。沢の流れが空気まで冷やしているようだ。岸辺には木がたくさん生えていて、木陰を作り出している。きれいな緑色をした木の葉を通してそそぐ陽の光は、そのままより柔らかいように感じられた。

大沢を訪れたのはこれが三度目なのに、毎回新しい発見がある。訪れるたびに風景を見る視点が変わっているようだ。一度目に釣りをしにきた時は、「魚に気づかれないように」と意識的にかがんでいたので、手もとや足もと

大沢の風景（2011年7月10日撮影）

がよく見え、小さな生きものに目がいっていた。二度目と三度目は、その緊張感がなく、じっと目を凝らすこともない。見えない部分も多くなったかもしれないけれど、その代わりにゆったりと川の流れの涼しさや木漏れ日の柔らかさに身をゆだねることができた。

この日は大沢で養魚場を運営されている佐藤和男さん（64）に、少しお話をうかがうことができた。佐藤さんは、ご自身のおじいさんが始めた養魚場を受け継ぎ、ここでヤマメを育てている。

「本当は本流の方がいいんだけどね。水が多いし。ここは水がちょっと冷たすぎる」と、生簀の魚にエサをやりながら仰っていた。「でも涼しくていいですね」という私の言葉に、「そうだねえ」と答える佐藤さん。子どものころは本流の方で、石で水をせき止めてプールのようなものを作り遊んでいたそうだ。昔の子どもたちは、涼むことと遊ぶことを同時に目的にして沢を訪れていたのだろう。

◆

取材のなかで、「涼むって何だろう」と、幾度となく考えた。まちのなかにも、プールや冷房の効いた部屋のように涼しい場所はたくさんある。ふだん、あつい場所から冷房の効いた部屋に移動すると「冷房って便利だなあ」と思う。でもその当たり前のように用意された涼があることで、沢で感じたような季節の移ろい、「あつさ」以外のものから得られる「夏らしさ」を、私は感じられなくなってしまった。

自然のなかには、人間のために用意された「涼」はひとつとしてない。用意されたものじゃないからこそ、そこには「涼」だけじゃない何かがある。私にとっては「安らげる時間」であり、昔の子どもにとっては「遊び」だった。

まちでの「涼」では得られないものはほかにもきっとあるはずだ。それを探しながら、これからの夏は「まちをはなれて」涼んでみたい。

永寿院でみられる十日市場 夏狩（なつがり）湧水群のひとつ。湧水を求めて、東京からも観光客がやってくる。写真はすべて７月22日に撮影

都留の湧水小紀行

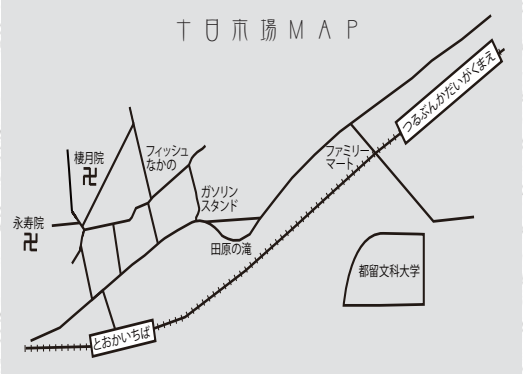
都留市は、湧水がある水資源豊かなまちです。とくに十日市場を訪れると、家のあいだを縦横無尽に流れる用水路の存在と、その水の透き通り具合には驚かされます。暑い夏、涼やかな雰囲気漂う十日市場へと足を運び、用水路や湧水といった水辺を散策してきました。そこで出会った水辺の生きものや、水がつむぎだす暮らしを紹介します。

偶然見つけたカワトンボ。オスのハネは、橙色と透明にわかれる。メスのハネは透明のみ

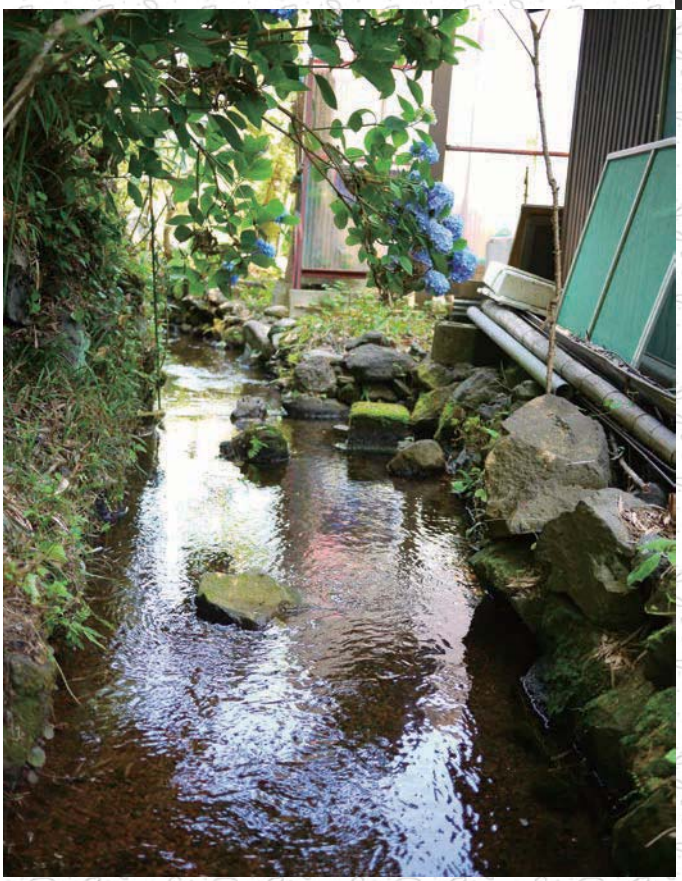
「あっ、トンボ！」永寿院の湧水のそばに腰をおろしているときだった。ゆらりと視界に入ってきた姿はまさにトンボで、胸が高鳴る。どのタイミングで見られるか分からない生きものとの遭遇は、思った以上に嬉しいものだ。葉に止まったところを見届けてから、ゆっくり忍び足で近寄りカメラを構える。すると、ハネが非常に鮮やかな橙色をしていることに気づいた。よく見ると身体は淡い水色をしていた。まさに水辺にぴったりな色をしたトンボである。図鑑で調べると、「カワトンボ」と紹介されていた。

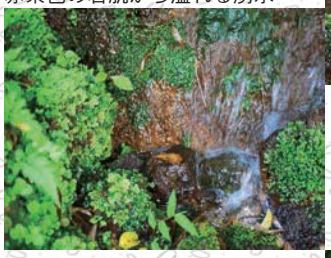
◇

十日市場にある水源山永寿院。住職の水庭浩道（みずにわひろみち）さん(86)によると、水が湧き出る土地を見つけた弘法大師が、延暦19年(西暦800年)に起きた富士山噴火の犠牲者を弔ってこの寺院を建てたそうだ。永寿院の湧水は、「平成の名水百選」にも選ばれているほど。「この水を使わないともったいない」の精神から、市の水道水と併用して、



眺めるだけでも清らかな水に癒しを感じるが、手をさしだし感じる水の冷たさ、口に含んだときの味わいもまた「涼」だ


永寿院裏側にある湧水の流れ。水量の豊富さから、この流れの下にある家では水車を２基設置し、はた織りをしていたそうだ


赤茶色の岩肌から溢れる湧水

湧水の岩肌に群生するウスバゼニゴケ

湧水を共同で利用するために設置してある貯水タンク

永寿院裏側にある森の斜面に咲くヤマユリ

湧水専用の水道組合がつくられた。５軒の家庭が組合に入り湧水を共同で利用している。水道水が使える今でも、自然に湧き出る水を大切に使い続ける仕組みが生きているようだ。水は私たちの暮らしに深く根ざしている。水道組合という地域独自の水の使われかたを知り、改めて水について考える機会となった。

◇

暑い夏の日、水のそばに居心地の良さを感じるのは、私だけではないだろう。今回はそんな水を通して、さまざまな出会いや発見があり、自分の知らなかった水辺の世界が開けてきた。ひとつの場所にじっくり身を寄せ五感を研ぎ澄ます。その行為が地域に愛着を持つ一歩であり、また興味を広げるきっかけとなるのだ。水がつむぎだす生きものの存在や人の暮らしを覗けば、きっと地域ごとに多様な世界が広がっているだろう。なんだか、水を頼りに地域を見てみると面白そうである。そのような新たな好奇心が芽生えた十日市場の散策であった。

崎田史浩（社会学科３年）＝文・写真

滝へ行く

私の所属するサークルでは毎年、夏になると滝に飛びこむイベントがある。イベントといってもちょっとスリルのある水遊びだ。いつもは大勢で遊びに行く鹿留川上流にある滝に、今回は一人でふらりと行ってみた。

毎年飛び込みに行く鹿留川上流にある滝。湿気が多く、周りの岩はどれもぬれている

7月1日午後4時ごろ、都留文科大学から原動機付自転車でおよそ30分くらいかけて毎年飛び込みに行く滝へ向かった。鹿留キャンプ場を通り過ぎてさらに上っていくと、徐々に気温が低くなっていることに気がつく。

滝へ出ると、大きな音を立てて水が流れている。水に手をつけるととても冷たくて、長い時間手を入れていたら痺れそうだ。もう少し気温が上がったら気持ちよく感じるだろう。

目を閉じて耳を澄ましてみれば、滝から落ちる水の音とは違う水の流れる音がしていることに気がついた。ゆったり下の方を流れる水の音だ。どこか遠くのほうでヒグラシの鳴き声も聞こえた。それぞれが発する音は雑音のようにも聞こえる。しかし不快に感じることはなく、その場を包む静かな雰囲気に溶けて混ざって不思議な音の調和をつくっていた。

滝の方から送られてくる風と湿気を含んだ空気が私にまとわりつく。水しぶきが服をびしょびしょにしてしまわないかと心配になるほどだ。辺りを見回せば大きな岩がいくつもある。コケや倒木がなにやら神秘的な雰囲気

ら下をのぞきこんでその高さやドキドキする気持ちを共感できるからこそ楽しいと思えるのだ。

流れる水や苔の生えた大きな岩、周りの木々を見ながら、なんだか久しぶりに自然のなかに来たなと思った。こどものころは自然のなかにいることが多かった気がする。滝や森のような、人の生活の時間とは切り離された空間のなかに足を運ぶ機会も今より多かったし、何より遊び道具がなくても生きものを追いかけて観察したり、木登りをしたり、砂や石で遊んだりした。遊びを通して自然という空間によく足を踏み入れていた。今はどうだろう。滝や森のような自然に接することはもちろん、道端に生える花や木といった身近な自然にも接することがなくなってしまったと思う。滝に行ってみて自然との距離がいつの間にか遠くなっていたことをしみじみと感じた。自然はこちらから近寄ろうとしなければ関わりのない空間になってしまう。今年の夏は自然を意識しながら過ごしてみるのもいいかもしれない。

を醸し出している。

しばらく滝の周りをふらふらしていると、川に入って釣りをしている二人の男性に出会った。地元のかたらしい。釣れますかと私が聞くと、お二人は今日の成果を見せてくれた。イワナとニジマスだ。釣った魚をくれるというので、いただいて帰路についた。

水の流れを見て、音を聞くとそれだけでなんだか涼しい気分になる。周りに緑があれば爽やかな気分になる。一人で滝に行ってみたら、大勢で遊びに行くときよりも自然を感じたり考え事をしたりしながら、いろいろなことに気がつき、意外にもゆったりと流れる時間を楽しめたことに驚いた。思わぬ出会いもあって、たまにはこういうのも悪くない。でもやっぱりサークルの仲間たちと遊びに行くのもいい。水をかけあってはしゃいだり、先にびしょびしょになった先輩に水のなかに引きずり込まれたり。一人だと水に入ろうとすら思わないし、滝から飛び込もうなんて絶対に考えない。滝の上か

藤森美紀（社会学科3年）＝文・写真

古民家の涼

都留市内には古いたたずまいの家々があちこちに残っている。周りの風景になじんだ外観を眺めるのも楽しいけれど、その内部も見てみたい。そんな期待が膨らんでいたおり、編集部と長年付き合いのある羽野幸（はのさち）さん（28）が築百年ほどの古い民家を借りて住んでいると聞き、お宅に伺わせていただくことになった。

お話を聞かせていただいた羽野幸さん（左側の女性）と西堀涼子さん

照りつける太陽がまぶしい7月3日の昼下がり、羽野さんがお住まいの都留市宝地区を訪ねた。お宅は二階建ての大きな造りで、見上げるとどっしりとした構えに圧倒される。玄関へ入り、左手に一段高く視線を移すと奥へ居住空間が広がっていて、落ち着いた色調の梁や、太くたくましい大黒柱が目をひく。やや低く感じる天井や大きな神棚なども特徴的で、この家のなかにあるもの一つひとつがとても興味深い。

本学の卒業生である羽野さんがこの家に住みだしたのは2年前のこと。大学を卒業してからしばらくはアパートに住んでいたが、学生のときこの家の大家さんと知り合ったのが縁で借家するようになった。その後、大学の先輩である西堀涼子（にしぼりりょうこ）さんと後輩の渡邊理恵（わたなべりえ）さんに声をかけ、かつて同じ吹奏楽部で活動していた三人がこの古民家で一緒に暮らすことになった。今年の春からは編集部の石川あすかさんも一緒に住んでいる。

風通しのよさ

古い家はどことなく涼しい。以前からそんな印象をもっていた。羽野さんにこの家のよいところを尋ねると、やはり夏の過ごしやすさという答えが真っ先に返ってくる。

「夏は快適。いま、一番いい季節ですね。涼しくて風通しがいいので。夏はこの家のよさを味わう感じです。そのぶん冬は熱がこもらないので寒いですね」

さすがに真夏の一番暑い時期には扇風機をまわすそうだが、それでもこの家で過ごす夏はとても快適だという。どうやら風通しのよさということが涼しさを感じる大きな要因となっている

南側に面した家の外観

玄関付近のようす

蚊帳を張るお二人

ようだ。そういえば、さきほどから心地よい風が絶えず室内に吹き込んで窓際のカーテンを穏やかに揺らしている。でも決して冷房機器から送られてくる風のように冷ややかではなく、一定に吹き続けるものでもない。ゆったりと吹いたりやんだりを繰り返し、家のなかを行き来している。それが身体に疲れを感じさせず、エアコンなどがつくりだす涼しさとは違った心地よさを感じさせているような気がした。

私は取材に来るまで感じていた蒸し暑さをいつしか忘れ、鎌倉末期の歌人で随筆家としても有名な兼好法師の言葉を思い出していた。

「家のつくりやうは夏を旨とすべし。冬はいかなる所にも住まる」（『徒然草』）。つまり家の造りや構造は、夏を基本とするのがよいのだという。兼好はつづけて、夏に暑さを凌（しの）げない家は耐え難いことだともいっている。

雪国出身の私としては、冬はどんな場所でも住めるというのは疑問が残るところだけれど、思えば昔は火桶や火鉢のような暖を取る器具はあっても、涼を取るための器具といったら何があっただろうか。せいぜい団扇や扇子くらいしか思いつかない。でも、たとえ今の冷房機器に匹敵するものがなくても、かわりに昔の人は夏を快適に過ごすための暮らしかたや家の建てかたを知っていたのではないかと思う。

空調設備が発達した現在では忘れられがちな、風土に基づいた知恵や工夫がきっとこの家にも活かされている。風通しのよい間取りがそれを物語っているようだった。

古民家に暮らす

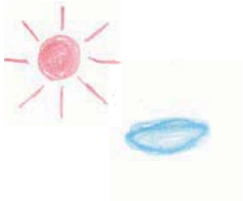
羽野さんにとってこの家で暮らす魅力とは、夏の過ごしやすさだけではない。薪で焚くお風呂や日のあたる縁側、重量感のある梁や柱、木戸の趣など枚挙に暇がない。そしてなにより、生活リズムが違うなかでもときに協力しあう四人の関係や、そこから広がる人の輪、地域との繋がりも大きな魅力となっている。見せていただいたノートには住人同士の伝言に加え、ここを訪れた人たちからのメッセージがにぎやかに書き込まれていて、ページをめくるごとに結ばれた人間関係のあたたかみが伝わってきた。

連日猛暑日が続くなか、以前から興味があった古い造りの家を訪ねると、そこには現代の冷房機器がつくりだす涼しさとは違う快適さがあった。私は、先人がもっていたであろう知恵や工夫を背後に感じつつ、羽野さんたちがこの家を介して広がる人の輪を大切にし、家に愛着をもって暮らしている姿に出会うことができた。

この家は百年という長い歳月を経てもなお住居としての役割を果たしている。最初は過去の遺構に思いを馳せるような感覚でこの家を見ていたけれ

牛丸景太（国文学科2年）＝文・写真

初夏の公園
～木陰をさがす～



都留に来て一年目の夏、よく散歩をしていた。街並みを知りたくて始めたものだったが、気が付くと毎回同じコースを辿ってしまう。なんとなく、公園の前を通りたくなる。公園が創り出す独特の雰囲気に、まだ馴染みのなかった都留でのくらしへの緊張感が和らぐような感覚があった。都留に住んで3年が過ぎ、ふと公園のことを思い出し、あの不思議な魅力にふれたくなって、都留のさまざまな公園を訪ねてみた。

6月17日の午後1時前、友人と大学を出発。日差しが強い。最初に、田原にある二の側公園に向かう。とても小さな公園で、屋根の付いたベンチと2台の滑り台が一体となっている遊具が設置されている。この日の快晴の空に、鮮やかな色づかいの遊具はよく映えていて、久しぶりに遊具で遊んでみたくなった。わくわくしながらはしごを上って滑ったがあまりにもあっという間に滑り終わってしまい、ちょっと物足りなかった。子どものころとまったく同じようには公園を楽しむことが出来ないと感じて、少し寂しく思えたが、それでも変わらない自分のなかの公園の魅力は何なのかと思う。気温が30℃を超えて日差しが強さを増すなか、次の公園に向かうペダルをこぐ足に力が入る。

二の側公園　6月17日撮影

目指したのは、下谷にある白木山公園。地図では山のふもとに位置していたので、木陰のたくさんある緑豊かな公園を想像しながら向かう。示された場所に着いても公園らしいものが見当らず、心身ともに暑さに弱ってきたので、近くにあった文化会館の職員の方に尋ねてみることにした。その方のお話によると、公園は文化会館の裏にあるものだが、落石があったので現在は封鎖されたということだ。許可をくださったのでロープを潜って入ると、草木が生い茂っていて、少し広い山道のようだった。後日調べてみると、ここは風致（ふうち）公園という、景観を味わうための公園に区分されていることが分かった。

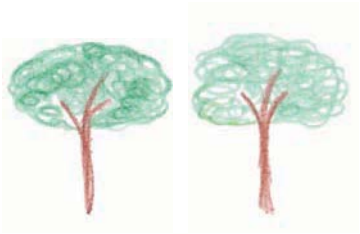
白木山公園　6月17日撮影

この日の最後に、城南公園を訪れた。足を踏み入れるのは2年ぶりだった。白木山公園からこの公園までが緩やかな上り坂になっていたうえに、到着した午後3時ごろはこの日の最高気温の35℃となっていて、へとへとだった。そんななかで、着いてすぐ目についたのは、ブランコのある一画。隣に大きな木があり、枝葉がよく茂っていて、ブランコのある場所に木陰をつくっている。楽しそう、というより涼しくなりたい、という欲求からブランコで遊びたくなった。木陰のもとでの風を切るブランコ遊びは想像以上に涼しくて、また思っていたより楽しかった。

城南公園　6月17日撮影

＊

7月13日、午後12時半ごろ出発。都留市玉川にある、玉川公園に向かった。運動場があり、グラウンドの外には植え込みや遊具



もある、今回訪ねたなかで一番広い公園だった。グラウンドの隅には木陰となっている一画があり、ベンチも7、8台あって、運動場を見渡せる位置にある。この日も30℃を超えるじりじりとした暑さで、枝葉がおとすシルエットに包まれて水分補給をするとほっとした。ときおり吹く弱い風が、木の葉をやさしく揺らすシャワシャワという音が心地良く、日々誰も訪れない時間もこんな空間・瞬間が存在していると思うと、何だかもったいなく感じられた。

＊

7月27日、午後3時に友人と出発。楽山公園に散歩に行く。授業で何度も歩いた場所だったけれど、季節とともに雰囲気も大きく変わっていた。入ってすぐ、20～30mほど続く見ごろの青紫のアジサイに目を奪われる。そして、散策しているあいだ中ずっと夏を感じさせてくれたのが、セミの鳴き声だった。アブラゼミのほかに、ヒグラシも鳴いていた。また、春と変わらず生い茂る木々は日差しをさえぎってくれて、夏を目と耳で感じながら、爽やかな気分で散策することができた。

玉川公園　7月13日撮影

楽山公園　7月27日撮影

やさしい、すずしい空間

公園に行く、というと小さいころはひたすら動き回って遊ぶことを楽しんでいた。けれど、今回は、いろんな公園を訪れて、夏の公園の魅力は、木陰から眺める公園の風景そのものかもしれないと思った。冷房のよく効いた屋内からまったく違う世界のような灼熱の戸外に出て、落差に麻痺しそうになりながら、公園で木陰を見つけ、ひと休みする。子どもたち、ブランコ、散歩する人、手入れの行き届いた植え込み……いろんな要素が作り出す空間は、きっとどこにでもある風景だけど、少し離れて眺めていると、その穏やかさに気づいて、すごく心が和んだ。

家電製品の与えてくれる無機質で均一な涼に慣れていると、木陰から得る涼はささやかで物足りないように感じるかもしれない。けれど身を置いているうちに、ときどき風が吹いたり少し陰ったりしてできる、むらのあるすずしい空間は、自然のなかに溶け込んでいるような感じがして居心地が良くなってくる。

2年前はすずしくなってからの散歩だったが、今回は炎天下のなかだったため、自分にとっての公園の魅力のほかに、自然のなかに「すずしさ」があることを実感できた。どちらも最近の自分にとってひどく非日常的なものになっていたと思う。今回の体験をきっかけに、今年はスイッチを押すだけではない、もっと能動的な「涼」み方を楽しみたい。

平井のぞ実（英文学科3年）＝文・写真

涼み終えて

どうやったら涼しくなるだろう
その答えは、きっと身体が知っている

自分の感覚を振り返って
さあ、どこへ行こう　何をしよう

野や山、まちで水辺や日影を探して近づいてみる
風の通る家を選んでみる

涼しくなる場所、涼しくなる方法は
感覚を頼りに探してみると
おのずと見えてくるかもしれない

時梨·涼む

第14回

フィールド・ミュージアムのたのしみ

H・D・ソローが『ウォールデン　森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。

その事象に立ち会うということ

●文・写真　西教生（本学非常勤講師）

クサギで吸蜜するカラスアゲハ

アルマンモモアカアナバチの巣

羽化してすぐのアブラゼミ

ソローは『ウォールデン　森の生活』で、池の水温の変化を例に「一日は一年の縮図です。夜は冬、朝は春、昼は夏、そして夕方は秋です」（第一七章　「春」）と書き、小さな世界に大きな全体を見るという観察の一例を展開しています。私はこの表現がとても気に入っているわけですが、自然観察をおこなうさいに重要な視点でもあると感じています。

一日のなかでも気温や日照条件は大きな変化があり、生きものが活発に活動をする時間帯はそれぞれの種類によって決まっています。夏の散歩のたのしみのひとつは、昆虫を観察することでしょう。たとえばヒグラシの声を聞いたり、その透明の翅を見たいと望むのなら、晴れた日には午後遅くに山に行く必要があります。また、春から夏の終わりにかけて、山にはいろいろな花が咲きますが、そこに来るチョウやカミキリムシの仲間などの昆虫を見るには、昼前から出掛けるのがいいでしょう。

昆虫が生きている小さな世界の時間から、彼らの暮らしを考えたとき、私たちが目にする事象はどういう意味を持つのでしょうか？それは多くの場合、偶然であり、予想のできない出会いであることが少なくありません。

ある日、物置の上に置いてあった竹の穴にコケが詰め込まれていました。竹や木の穴にコケを詰めて巣を作るのは、アルマンモモアカアナバチです。ハチの姿を確認できなくても、それとわかる痕跡に気づけば出会えます。またある日の夕方、羽化中のアブラゼミを見つけ、その場面に立ち会いました。これらは決して珍しいものではありませんが、普段の生活ではあまり目にしない事柄です。自分の日常のなかで起こる出来事であるからこそ、その不思議さに見入るわけです。それは、彼らが近くに生きていることを知る嬉しさとも言えるでしょう。

ある事象に立ち会い、見届けることは、そのものと深く関わることでもあります。おそらく、そこに長い時間は必要ではなく、大きな全体を捉える視点で見ることが大切になってきます。そのために日々、広く、遠く歩き、さまざまなものを観察していきたいと考えています。

身の丈にあった技で自然と接する

●文・写真　北垣憲二（本誌発行人）

尾崎山に残る馬道（うまみち）の跡（左側の窪地）。右の林道は現在、遊歩道となっている（2011年7月27日撮影）

7月27日、水田で水見をする清水貞一（ていいち）さん（88）にお会いしました。近ごろはスズメやトンボの姿をあまり見かけなくなったと貞一さんは言います。２００９年などは米の収穫前に防鳥ネットがいらなかったそうです。そういえば今年の春はチョウがずいぶん減ったという話も大学内で聞きましたが、この夏はどうでしょうか。

◇

貞一さんとお話をしているうちに、水田のようすがこれまでと違うことに気づきました。十日市場では豊富な湧き水で稲作をしています。湧き水は稲作をするには水温が低いため、このあたりでは水田の畦に沿うように水路をつくります。湧き水は水路を通るうちに温かくなるというわけです。今年は貞一さんの水田にこの水路がありません。

長年、稲作をやってきて土地の保水力が高くなってきたそうです（貞一さんは「水持ちがよくなった」と表現していました）。水田に取り入れる水量を少なくしても干上がることはなく水温も高く維持できるはず。そのように考えて今年は水路なしで稲を育ててみることにしたそうです。この決断は長年の経験

から導いたものでしょう。貞一さんの判断と技に稲はどのように応えるのでしょうか。今から生長がたのしみです。

◇

貞一さんの水田からは大学裏の尾崎山が一望できます。そして尾崎山を指しながら、むかしの山仕事について語ってくださいました。冬期は毎日のように尾崎山に通っていたので地形の細部まで覚えているそうです。

伐採した木の運搬のために１９４３年から１９６５年ころまで馬とともに稜線あたりまでよく登ったと言います。馬で木材を山から運び出す仕事をこのあたりでは「ズルビキ」と呼んでいます。十日市場だけでも当時９人ほどがこの「ズルビキ」をしていたそうです。そして現在の田原の滝付近に、マツやスギ、ヒノキ、線路の枕木に使うクリを運び出したようです。

木材を運び出す道は、地主に迷惑をかけないようたいてい土地と土地との境界を縫うようにつくられました。たぶん今でもその跡があるはずだよ、と馬道の位置を教えてくださいました。

私はさっそく馬道の今を確かめるために尾崎山に向かいました。アスファルトによる照り返しが厳しい道路とは異なり、森のなかは適度に湿り気を含んだ風が吹き抜けていきます。森に入り20分ほど歩くと、山道に沿うようにつづく幅２ｍほどの窪みに気づきました。これが貞一さんの言う馬道の跡です。そのように教えていただかない限り、この窪みがどうしてできたものなのか私にはまったく分からなかったにちがいありません。貞一さんは山道を、馬は木材を曳きながらその脇を歩いたのでしょう。人が山仕事で行き交い賑やかだったというこの森の当時のようすが目に浮かぶようです。

尾崎山の馬道は、役目を終えてからすでに50年近くが過ぎようとしています。いまでは山道との区別もはっきりしません。馬が木材を運搬してできた道には落ち葉が厚く積もり、堆肥場のようになっていました。そして良質な土ができつつあります。ミミズも豊富なのでしょう。モグラのトンネルが縦横に走っています。

貞一さんはこの「ズルビキ」に決して巨大な機械やエネルギーを使いません。稲作もほとんど一人でこなしていきます。自らがコントロールできる身の丈にあった技で自然と接することが、ゆたかな自然の再生へとつながっているのでしょう。

稲の生長のこれからを見据え対応する力があるのも、長い時間をかけた自然との関わりのなかでていねいに観察する目を鍛えてこられたからでしょう。日々の散歩でもこうした力は養えるはず。日ごともっと広く地域を歩け、と背中を押されるようにして尾崎山の森にわずかに痕跡を残すかつての馬道を歩きました。

これまでは田に水路をつくっていた（2009年6月8日撮影）

貞一さんは今年、田に水路をつくらなかった（2011年7月27日撮影）

ひろいもの

1．シラカシの葉

ひろったものをそのままのかたちで残しておきたい。
並べてみるとどんな世界がみえてくるのでしょう。
わたしの「ひろいもの」をご紹介します。

香西恵（社会学科３年）＝文・写真

これは、今年の６月から７月にかけて、本学コミュニケーションホール横の小径を通るたびにひろった、シラカシの葉です。シラカシがこの時期に葉を落とすこと、さまざまな色やかたち、模様をしていることに、初めて気がつきました。模様をたどってゆくと、一枚いちまいが地図のようです。

いちまいの写真から

一枚の古い写真から広がった、谷村の大火の記憶。
当時を知る都留在住の方にお話を伺った。

反保智栄（英文学科３年）＝文・写真

初取材

6月20日（月）曇り。夕方、友人から自転車を借り、学校を飛び出す。取材の目的は都留市在住の奥隆行（おくたかゆき）氏の写真集『奥隆行写真コレクション』に掲載された写真「仲良し」（27頁中段の写真）についての取材だった。それには小高い場所に位置する西涼寺の前で、はにかんだ2人の女の子が写っている。彼女たちがカメラからわざと目線をはずしている姿が愛らしい。古い写真を見ていると、現実味のないものにも思えたり、何だか安心するような懐かしさも感じたりする。今回の写真もそうだ。見つめていると、純粋にその写真について知りたいという気持ちがわいてきた。

今回の取材先は、都留市駅近くの西涼寺のそばにお住まいの小池利成（こいけとしなり）さん（73）宅。緊張で呼び鈴を鳴らすことに躊躇していたところ、時間ぴったりに家から出てきて、お宅へ迎え入れてくださった。さらに姉の喜三子（きみこ）さん（77）にもお話を伺うことが出来た。撮影時期は寺門が残っているということで大火前だという。

大火の記憶へ

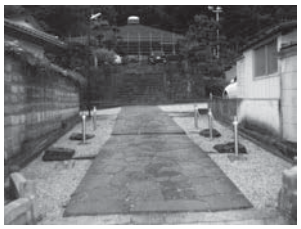
ここでの大火というのは、昭和24年に起こった谷村の大火のことである。当時小学生だった小池さん姉弟。大火が発生した日には遠足を控えていたという。小池さん宅は、大蔵が残っただけで、家は全焼した。

大規模な災害であったにも関わらず、犠牲者が出なかったのは不幸中の幸いだろう。鎮火後、町中には手押しポンプが落ちていたという。現在と比べて消火効率がよいとはいえないが、自力で水を汲み上げて消火する方法が当時は多く採用されていた。火の手は、人の手による消火スピードよりも速い。手押しポンプの残骸は、人びとが命を守るために、消火活動を投げ出してでも避難するという勇敢な選択をした「証拠」とでもいえるだろうか。町にあった池のなかの鯉は、大火で茹だってしまったという。その後の食糧難で、死んだ鯉を食べた人もいるそうだ。極限状態におかれた人々の行動が、私にとって遠いことのように思った。

現在のようす。西涼寺前

大火後、小池さん一家は唯一残った大蔵のなかで家族5人が暮らした。困ったのはトイレだったそうだ。庭に穴を掘って、焼け残った板で小さな小屋を建て、しばらくのあいだはそこで用を足していたらしい。さぞ不便だっただろう。家族との思い出が詰まった「家」を失ったときの感情を別にして、淡々と大火のお話をされる小池さん姉弟の姿はたくましい。

私はお話を聞いているあいだずっと、お二人が大火の発生した昭和24年を軸にして、それぞれの記憶をたどっているような印象を



右：西涼寺前の小径
左：喜三子さんと一緒に

受けた。そして、お二人の話の内容が衝撃的であったのもそうだが、記憶の鮮明さにただただ、感心していた。

町の変化

現在、大火の面影はあるのだろうか。私は最後に「昔と都留の町は変わりましたか？」と尋ねると、「町並みはほとんど変わっていない」と利成さん。（利成さんは大学進学で東京に引越し、13年前まで都留を離れていた）強いて言うならばここ10年ほどで、新しい市立病院ができたこと、都留文科大学前駅ができたことくらいだそうだ。利成さんにとっては町の景観よりも、都留で暮らす人びとの変化のほうが印象的なようだ。昔は近所付き合いが積極的だったが、今ではそれが無くなりつつあることが寂しいという。小池さんのご家族がかつて「小池マンション」という下宿を経営されていた昭和30年ごろから昭和の終わりにおいても学生の変化を感じていたようだ。昭和の半ばには一つ屋根の下で家族のような交流をしていた学生たちも、昭和の終わりが近づくと雰囲気は変わり、干渉を好まない学生が多くなっていったそうだ。

「つながり」

ふと時計に目をやると2時間が経とうとしていた。利成さんの奥様のカツ子さんがいれなおしてくださったお茶をいただきそろそろお暇（いとま）しようとした時、利成さんがまたおいでなさいとおっしゃった。私は素直に嬉しくなった。家を出て、今回の話のきっかけになった写真の撮影場所、西涼寺の前に立ってみる。昼間の暑さが遠のいている。私は、伺ったお話をまだ全部は咀嚼できずにいた。ただ、新しい出会いの新鮮さのようなものにどきどきしていた。自分の足で現場に行き、そこの空気を吸い、雰囲気をとらえることで、その出会いの喜びをあじわうことができたように思う。

取材中、相手が本当に伝えたいことは何か聞き出すことの難しさを痛感していた。もしかすると小池さんが伝えたいことと、じっさいに口から出る言葉はすこしズレがあるのかもしれないと感じた。だからこそ、聞く側の私が語り手の表情やしぐさから、自分との「つながり」を想像する力がいると思う。

今回は、写真が撮影された当時に想いを馳せて初めて、小池さんの想いが伝わってきた気がした。それは都留の町と人との「つながり」、都留の過去から現在への「つながり」、また、都留の人びとと私自身の「つながり」を実感できたひとときであった。

◇中段の写真…「仲良し」昭和22年、西涼寺前で撮影。寺門は大火で焼失（本学フィールドミュージアム部門『奥隆行写真コレクション』より）

商店街と私

駅から見た三町商店街

駅前通りの街灯

「こんな店があるんだ」

この思いが私と三町商店街の出会いだった。

私が都留市駅の近くにある三町商店街を知ったのは、本学の「フィールド体験」という授業でいった「宝の山ふれあいの里　ネイチャーセンター」からの帰り道。

今年の春に都留へやってきた私は、都留についてまだあまり詳しくない。地元とは違った空気や雰囲気に慣れようと必死な状態で、街を見て回る余裕がなかったからだ。けれど「宝の山ふれあいの里　ネイチャーセンター」から大学に帰る途中、バスのなかからぼんやりと外を見ていた私の目に、ある光景が映った。

「……商店街だ」

商店街は私にとって馴染みのあるものだ。私の地元にも商店街がある。そして私の「初めてのおつかい」は、近所のおばちゃんが経営する小さな商店（といっても幼いころの私にとっては何でも揃う魔法のお店だった）で卵を買ってくることだった。このように、私にとっての商店街は、買い物のしかたを学んだ場所でもある。

さっそく三町商店街にいってみた私を包んだのは、懐かしい空気だった。商店街はぶらぶらしているだけでも、新しい発見があって、楽しい気持ちにしてくれる。見たことのない野菜を見つけたり、「このお店素敵だなぁ」と思って眺めてみたり、そんな風に歩いて回り楽しい一日が過ごせた。

◇

何回か三町商店街を訪れてから授業で商店街について学ぶ機会があった。その時に商店街の現状を「ナカムラ薬店」の金巻さんにうかがった。

三町商店街は横町、田町、栄町とで構成された自然発生的な商店街として発展してきたのだが、一度、昭和24年5月13日の「谷村大火」で焦土と化したらしい。そこから人々が力を合わせて復興を続け、今の商店街となった。「谷村大火」のさい、西涼寺の儀秀稲荷社だけが焼け残り、それが人々の心を捉え5月13日の祭典が始まった。「十三」を「とみ」と呼び、「十三の市」として昭和34年4月から商店街は毎月13日に共同大売出しをおこなっている。

商店街の休憩所である三町亭

（右写真）三町商店街のマスコットキャラクター「十三吉」と四字熟語の看板。あなたのお気に入りを探してみてはどうだろうか

また、狐をモチーフとした「十三吉（とみきち）」がマスコットキャラクターなのも、その儀秀稲荷社が関係している。三町商店街のそれぞれの店の看板には「十三吉」がいて、その下には四字熟語が書かれている。この四字熟語は店ごとに違って、少し変えてあるので見て回ると楽しい。私がおもしろいと思ったのは「深沢食料品店」の四字熟語。「千載一遇（せんざいいちぐう）」を「鮮菜市遇（せんさいいちぐう）」としてある。見た時「なるほど！」と思った。

三町商店街は固定客が多く、お客さんとの関係が深い。また、商店街の役員の方々が十三の市でイベントを実施するなど、積極的に活動をおこなっている。商店だけではなく、病院、金融機関、市役所、小学校など生活のなかで利用されることが多い機関に近いため、利用しやすい。そして休憩所として使える三町亭があり、歩き疲れた時のんびりできる。

そんな三町商店街だが、客の減少や後継者の不足などの問題がある。私の地元でも経営が上手くいかなくなったり、継ぐ人がいなくて続けられなくなり、看板を下ろしてしまう店があった。そんな光景を見ていると、なんだか小さいころの思い出の場所も失われていくようで悲しい気分になる。

◇

大型の量販店でも買い物は出来るが、私は商店街の店の方が好きだ。人と向き合っている感じがするし、オススメの商品も聞ける。あと、名前を覚えてもらって世間話をしてもらえるようになると、なんとなく、くすぐったくて温かい気持ちになる。そんな商店街がなくなってしまったら交流の場も失われるし、昔からあったものがなくなってしまうと寂しく思う。

一人暮らしで人恋しくなって、少し散歩してみたい気分になった時、商店街に行くと人と触れ合え、また故郷のような懐かしさを感じることができる。商店街は私にとっての故郷の象徴のようなものだ。そして、新しい発見や出会いを与えてくれる場でもある。これからも商店街を訪れて、そこで感じたことを大切にしていきたい。

岩佐志保（社会学科1年）＝文・写真

「つくる」をみつめる　第１篇

夢中になる ものづくり

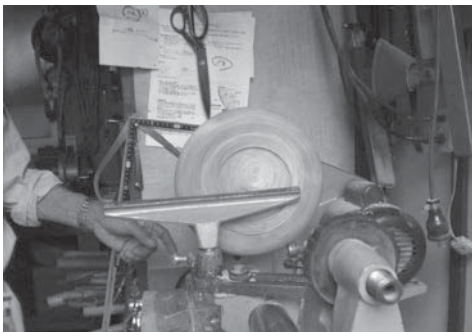
だれかのために「つくる」。自分の趣味で「つくる」。本、料理、彫刻、物語……さまざまな種類のものを「つくる」。「つくる」にはたくさんの想いと形がある。私は自分の想いを形にすることが好きだ。でも、なぜ想いを形にしたいのか、どうして「つくる」ことが好きなのか。そもそも「つくる」ってなんだろう。ものづくりをする方とのお話をとおして、「つくる」ことをあらためて考えてみる。

部屋に置いてある高部さんの作品。
中央にあるのが全長 60cmほどある特大けんだま

材と一緒に

6月25日にお会いしたのは、都留市宝にお住まいの高部公さん（72）。小麦色に焼けた肌で、顔をしわくちゃにして笑う姿が子どものように元気な印象を受けた。高部さんは趣味で、おもに木材を使ったものづくりをしている。ご自宅の居間にある棚の上には、高さ30㎝ほどの真っ赤なポストが飾られていた。見た目がピカピカしていたので、鉄か何かでできているように見えた。どこかで買ったものかなと思い伺うと「全部木でつくってるんだよ」と言う高部さん。木のなかをくり抜き、6つのパーツを組んでつくったという。じつはこのポストは1円玉や5円玉を入れる貯金箱になっている。以前貯めていた缶の貯金箱がいっぱいになったので、代わりにこのポストを貯金箱にしたらしい。「だけど、お金を取り出す穴がないから、取り出すときには壊さないと」と、笑いながら話してくれた。

ほかにはどんなものをつくっているのだろう。そう思っていると、高部さんが「あそこにあるのは全部つくったものだよ」と隣の部屋を指差す。そこには、木材でつくられた多



右：作業場にある、木を削る機械
左：乾燥中の木材

くの作品が置いてあった。さっそく近くでよく見てみる。年輪がきれいな模様のようになっているテーブルや大きさが違うお盆、臼（うす）やわなげ、特大けんだま……と実用品から遊び道具までさまざまな作品があった。臼などの大きいものは1週間かかるが、お盆などの小さいものだと1時間でつくりあげるという。

高部さんは、昔から家族のなかで自分だけものづくりが好きだったらしい。いつごろから本格的に始めたのかを伺うと、「定年退職したらつくり始めたいと思ってた」とのこと。じっさいは、退職する5年くらい前からものづくりを始めていて、もう今年で20年くらいになる。

高部さんは自己流でものづくりをする。雑誌や新聞の写真を見て「これをつくりたいな」と直感的に思ったものを切り抜き、高部さんお手製の帳面に貼る。それを見本にしてものをつくる。設計図は書かない。「適当に木を切って、それをじっと見る。そうすると、この大きさはこれができそうだな、っていうのが自然とわかるから、その感覚でつくっている」

木を見ただけで完成した形がパッと浮かび、感じたままにつくる。材料を材料としてとらえるだけでなく、一緒にものをつくっていく相棒として、対話をしながら形にしていくという感覚なのかなと思った。

家の裏にある作業場の小屋に案内してもらう。小屋の隣には山で切ってきたり、仲間うちでもらったりしたサクラやケヤキ、イチイといった木材が置いてあった。「切ってすぐに使うんじゃなくて、しばらく乾かしてから使うのがいい」と言う高部さん。だからこれらの木材は乾燥中だという。高部さんは「畑をやっているから、作業はほとんど冬にやってる。それに、夏場だと暑くてね」としみじみと言う。作業場の小屋は屋根が低く、窓も少ない。たしかに、暑い日に作業場にこもるのは大変そうだ。

「つくる」を楽しむ

高部さんはつくったものを紹介してくださるたびに「いたずらばっかしてる」と言いながら楽しそうに子どものような笑顔を浮かべていた。つくれるものや興味があるものは、何でもすぐにつくる。

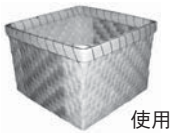
「つくったものを自分で使うことはあまりなくて、できあがったものを眺めるのがいいんだよね」

そう言っていた高部さんにとって「つくる」とは何かを伺うと、「生きがい」であり「一番楽しい時間」だと言う。つくる行為そのものを心から楽しんでいる姿がすてきだなあと思いながら何度も頷く。

初めて高部さんがつくったものを見たとき、不思議とわくわくするような、ずっと見ていたいという気持ちになった。お話を伺ってから考えてみると、それは、高部さんが楽しんでつくっていた想いが、ものからも感じられたからだと思った。私も、たとえば『フィールド・ノート』を数十年後に読み返してみて、自分が書いた記事から、取材のときや記事をつくっているときに感じた想いや経験したことを再び味わえたらいいなと思う。

ものが、つくった人を語る。私も、ものとそんな関係を築いていけたら、「つくる」ことがもっと好きになれそうだ。

前澤志依（国文学科2年）＝文・写真



使用済みの荷物用テープ（青色と黄色）で編んだカゴ

ジェンギズ窯を訪ねて

小道の隅に付けられた小さな看板。良く見ると、手書きで「ジェンギズ窯」と控えめに書いてあります。あるときは看板の横に「セール」と貼ってあることも。なんだか面白そうです。看板が指し示す先は、車一台がようやく通れる細い道。人里離れた場所で暮らす、ジェンギズさんの工房を思いきって訪ねてみました。

狩野慶（ゆずりはら少年自然の里）＝文・写真

軽快な声が聞こえてくる日本語のラジオから、トルコの「ネイ」という笛の音色に変わります。抑揚が効いていて、ゆったりとした、そしてどこか涼しげな音色です。「日本でいう尺八のようなもの」と説明してくれるのは、ジェンギズ・ディクドゥムシュさん（45）。トルコの首都アンカラで生まれ育ち、今はここ上野原市栂原（ゆずりはら）に建てた工房で陶芸家として暮らしています。

ジェンギズさんのつくる湯呑みやお皿は、はっきりとした水色を表に出したものが多い印象です。

「トルコでは空色をつかうことが多い文化ですから」

と話すジェンギズさんは、日本で好まれる色と、トルコで好まれる色をユニークな視点でこう説明します。

「日本の色は、抑えの効いた、でもよく見ると飽きない色で、もやのかかった森のなかに合うような色。トルコでは色がはっきりしないとケチったかと思われる。向こうは太陽がまぶしいので。花はカーネーションとかバラとか、作物だと東のほうはスイカ、地中海のほうはオレンジ、内陸ではリンゴなど、はっ

工房に並ぶ器。はっきりとした空色や千草（ちぐさ）色のものがある

きりとした色が多いんです」

小道に付けられた手作りの小さな看板を頼りにしなければ、なかなか辿り着けそうもない場所にあるジェンギズさんの工房。隣に立てられた自宅は、大きな屋根が斜めにつけられた洋風の家。どのような経緯で今のような暮らしをするに至ったのか興味が湧いてきます。

美術科と陶芸科の二つの大学を卒業するまではトルコで暮らしていたというジェンギズさん。その学生時代に、一人の日本人のかたとの出会いが日本へ向かうことになったきっかけです。「今では70代」というその日本人のかたが住んでいたマンションには少し困ったことがありました。当時、そこには水がとおっていなかったようなのです。そのことを知ったジェンギズさんがバケツにくんだ水をしばしば運んで届けたことがきっかけで、しだいに親しくなっていきました。陶芸に興味があったというその日本人のかたから、益子（ましこ）焼で有名な栃木県益子町のことを紹介されます。

「言葉が分からなくても、目の前のことしか見てなかったですから。あぁ行きたいですねと言って、日本へ行くことにしました」

当時25歳。それから7年間、益子町で研修生として暮らすことになりました。そのあいだに結婚もします。

そこから桐原で暮らすようになったのは、偶然テレビで取りあげられていたのがきっかけだそうです。そろそろ独立しようと思っていた頃で、桐原の素朴さと静かさに魅かれたといいます。移り住んだ当初は地域のかたから家を借りて暮らしていました。

もともとは二年くらいでトルコへ帰るつもりが、今年で日本に移り住んで20年目を迎えます。

「必死になんでも吸収しようとしてきましたから、なんだかこれからなにが起きても不思議じゃない、というのがあります」

どこか俯瞰した語りにたくましさを感じます。いっぽうで、もっと自分の作品が受け入れてもらえるようになるにはどうすればいいか、20年後くらいに自分は何をしているのだろうか、と悩みや不安は尽きないようです。それでも「悩めるかぎり、まぁいいんじゃない」とあくまで前向きです。

★

ジェンギズさんは、人との出会いを時に大きな軸としながら流れるように生きてきたのだな、という印象がありました。でも少し見かたを変えると、積極的に生きかたを選び取ってきた、とも思えてきたのです。「悩めるかぎり、まあいいんじゃない」という語りに少し勇気をもらったと同時に、生まれも育ちも大きく違うジェンギズさんがこうしてダイナミックに生きる姿を見て、僕自身、今までの出会いが今の自分にどのような影響を与えているのか、捉え直してみたくなりました。それは、これからのさまざまな出会いをさらに丁寧に見つめることができるきっかけになるようにも思うのです。

フィールドとフィールド・ノートの記憶

FIELD·NOTE 9th ANNIVERSARY

N 中屋敷フィールド
B 図書館横ビオトープ
N 中屋敷の果樹園
H 辺殿フィールド
O 大沢フィールド
St 三の側ビオトープ

本誌『フィールド・ノート』は今年で9周年を迎えます。この9年間で、都留の自然や都留で暮らす人びとのこと、そして時には都留を飛び出して、見たことや感じたこと、考えたことを記してきました。今回は9周年を記念してフィールド作業の原点であり、現在も編集部員がとくに米・麦づくりの作業に取り組む「中屋敷フィールド」の過去をふり返ってみることにしました。

石川あすか（社会学科4年）＝文・現在の写真
本学フィールドミュージアム＝過去の写真

2002

4月 0号 発刊！ 月刊として始まる

5月 1号 特集：田畑
N あずまや 完成

6月 2号 水
N ソーラーパネルはじめました

7月 3号 ゴミ
N イノシシの被害あまりなし。山芋、ジャガイモ、キュウリがイノシシに食べられる

8月 夏号 別冊フィールド・ノート

10月 4号 収穫
N ズワイガニを見た！

11月 5号 水掛菜 ～湧き水が育てた名脇役～
N 今年から果樹園復活作業 ウメ、モモ、ビワ、キウイ

12月 6号 冬じたく

2003

2月 7号 味噌造り

3,4月 8号 ①ワサビ ②野外へ誘う絵本

5月 9号 フィールドミュージアムへようこそ

6月 10号 山菜 ～ちょっぴり苦い春の味～

7月 11号 路上観察 ～わたしたちの、憩いの場～

8月 12号 外来種 ～外国から来た生きものたち～
N キウイに柵をつける
O カワネズミの森づくり。石を組んで一畳のワサビ田を数枚つくる。カワネズミの隠れ家・餌場に

9月 13号 キャンパスの自然財産を歩く
N クルミ、ハシバミを育てている。スギの枝打ちをはじめる。小屋前の小川に石組みをつくる

10月 14号 キャンパスの生きものの現在

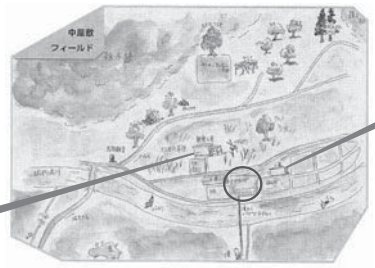
11月 15号 水辺の記憶 ～こんな記憶もあったんだ～
B「新図書館」のビオトープ（現在の図書館横ビオトープのこと）に植える苗を仕立てるため、十日市場の畑の一角にスイカズラを5株植える

中屋敷フィールド今昔

十日市場にある中屋敷フィールドは、柄杓流川（ひしゃながし）沿いにあり、山の谷間にあるフィールドです。この谷間一帯が昔「中屋敷」と呼ばれていたことから、私たちはこう呼んでいます。南向きの斜面は日当たりがよく、このフィールド内ならほとんどどこにいても滝の音が聞こえてきます。

十日市場にお住まいの渡邊宗男（わたなべむねお）さん（81）は1962年から中屋敷の土地、3反歩（約3000㎡）で稲作を始めました。当時、渡邊さんの水田は全部で12枚あり、水田同士の境界は、柄杓流川から運んできた石を組んでつくりました。渡邊さんは会社勤めと並行して田畑の作業をしてきたそうです。しかし、自身がご高齢であること、1990年ごろからのあいだイノシシの被害があまりにもひどくなってきたことから、2003年を最後に中屋敷での水田をやめました。

23 号：2000年にできた観察小屋。右下の写真はこの小屋の棟上げ式のようす。もちを投げた。



23 号：中屋敷フィールドのマップ
（＊）マップ上の○は現在田畑として利用

26 号：改築中の「渡邊小屋」

2004

6月

22号 水の恵み溢れるまち

N 6月5日、中屋敷で田植えをおこなう。北垣さんと学生にとってここでの田植えは初めてのこと。13日、農機搬入路の側面に土と石で石積みを築く。この時、中屋敷には9枚の水田があった

B 4月30日、大切に育ててきたメダカ（富士吉田の明日見湖産）8匹を池に放す。6月7日には稚魚が見られる

4月

20号 春だ！散歩に出かけよう

N ツリーハウス完成！　クルミの木、高さ6mの位置にクルミの枝とほかの枝、ロープを使用

2月

18号 フィールドを育てよう
～こんな作業をしています～

12月

16号 ①「水辺の記憶」展を振り返って
② 水掛菜

1月

17号「フィールド」へ行こう

3月

19号 えほん
～おとなもはまるえほん～

5月

21号 都留を感じて
～三ヶ国の目から見た都留の人と自然～

B 新図書館の横でビオトープづくり。「さまざまなチョウが舞い、トンボが飛びかうキャンパスとなるような」ビオトープを目指す

7月

23号 桑をもっとよく見てみよう

H 6月21日の台風6号で倒れた木のうち、遊歩道をふさいでいるものを伐る

25号 お茶と和菓子

N 23日もう一枚の田んぼで稲刈り。水田と川のあいだにあるケヤキの枝を伐る。枝はエンドウなどを育てる柵にした

O 10月30日佐藤さんから借りている養魚場に水を引く。10月17日橋を改修。板の上にフェルトを貼り付ける。設置して10年経過していた

11月

12月

26号 富士急行線の記憶をたどる

N 観察小屋の改築を開始。壁板、天井板には辺殿フィールドで伐りだしてきた材を使用する

10月

24号 生きものの住む場所
～身近にある自然～

N 2日田植えは二枚の田んぼでおこなう。二枚中一枚の田んぼで稲刈り。イノシシに稲穂を食べられていた。もう一枚はカヤネズミの観察用に残す

2月

28号 お寺の時間 神社の時間

O 2004年11月にヤマメの発眼
卵約5000個やってくる

2005

3月

29号 よってけし都留
都留観光のススメ

N「ムササビを呼ぼう計画」の一つをおこなう。樹高が15mあるスギの木を枝打ちし、この木に巣箱を設置する。葉や花がムササビの食べものとなるツバキをスギの下に植えた

4月

30号 花と暮らす。

N 昨年植えたレモンの木は冬の霜で枯れた。今年新たにレモンを2本植える

N 畑にレモン、エノキ、カラタチを植える。エノキは間引きしたものを植え、カラタチは種から育てる

1月

27号 暮らしの記憶展
～写真が語るわたしたちの町～

N 小屋で寝泊まりできる状態にした。太陽光パネルを軒に設置。命名「渡邊小屋」

O 養魚場の水量を多くするため、堰をかさ上げする。ここへヤマメ、順調に育つ

5月

31号 ①ついに3周年
②山に登ってみた ～山族のススメ～

N 小屋のなかに火を焚く場所をつくった。地面を80cmほど掘る

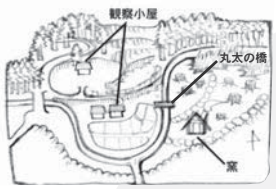
O 4月30日ヤマメの稚魚約3000匹、体長約7cmを川のそばに移す

本誌発行人の北垣憲仁さんは2000年、中屋敷に小屋を建てました。北垣さんは小屋を「動物観察の基地」と考えています。よりじっくりと動物の観察をおこなうため、2004年の一年間は中屋敷と大沢の小屋との両方で生活をしました。観察の場所には渡邊さんの田んぼも含まれています。

田んぼにはさまざまな生きものがやってきます。水を張るとトンボやカエルが産卵にきたり、稲と稲のあいだにはカヤネズミもやってきたりするようです。田んぼがなくなると今までここにきていた生きものや、田んぼのつくりだす景観は見られなくなってしまいます。渡邊さんが田んぼをやめると知って、それを残念に思った北垣さんは2004年、学生と一緒に渡邊さんの田に苗を植えました。

現在では一枚の田んぼ（＊マップ）で米・麦の二毛作をおこなっています。

注・この年表は、「いつ、何をしたか」が書いてある冊子を示しています



39号：中屋敷フィールドのマップ

2005

6月

32号 初夏の散歩を楽しもう
～「都留の生きものマップ」を片手に～

N 6月1日 田植えをおこなう

10月

34号 戦争の記憶

O 観察小屋前の小川へ飲料用にするための水を引く。使用したパイプの直径は30mm。落ち葉で水がつまらないよう、水の取り入れ口にサイズの異なる金網を置いた

2月

38号 つる昔ばなし

N 炭焼きの準備を2005年12月から始める。1月下旬、中屋敷の川をまたぐ橋を渡邊さんが作成。橋には丸太と針金を使用。2月上旬に火入れをし、その2週間後に炭を取り出す

2006

7月

33号 川をめぐる水の旅

N イノシシよけの柵づくり。6月24日に麦畑、7月9日に水田の周りに取りつけた。柵は杭にトタンを取りつけたもの

11月

35号 秋を探しに
～「秋の実り」～

12月

36号 企画展
未来に伝えたい都留の記憶

B 図書館横が多くの人にとって魅力のある場所となるようにと、12月8日「ビオトープマップ」設置（右上写真）

57号：図書館横ビオトープに看板を設置する

1月

37号 大家さんを訪ねて

3月

39号 炭焼きを楽しむ

N 渡邊さんの言葉：この時つくった窯のあるところは、北向きで凍ったりすると乾きづらいから炭焼きには適さない。ほかの人の土地や茅、草のあるところを避けると良い

丸太の渡邊橋

39号の特集で炭を焼くことになったとき、渡邊さんが作った橋です。この橋はおおよそ半日で作りあげたとのこと。橋の上からは丸太の隙間から川が見え、ぐらぐらと揺れることもあったそうです。今はもう見られない、丸太の橋です。

4月

40号 フィールドミュージアムへようこそ2

N 図書館横ビオトープは今泉吉晴氏の設計。周辺の山の自然とキャンパスをつなぐ「生きものの回廊」をイメージ

2007

10月

52号 都留、この味

O 3年ぶりに小屋そうじ
カワガラスとヤマネの巣箱をかける

6月

55号 フィールドとは何だろう

O 4月20日ヤマメの引っ越し。4つに分かれた池があり、そこへ育った年数ごとに入れ分ける

N 4月30日麦の土寄せ

2008

1月

53号 あの人、このこだわり
～インタビューで探る地域の顔～

3月

54号「てく」でゆこう

N「渡邊小屋」にひさしをつくる（左写真）

11月

57号 こころのそばに佇む信仰

N 11月6日脱穀。脱穀後の麦は約30kg。収穫前後でスズメとネズミに食べられたものがかなりあった
10日 麦蒔き。肥料として初めてオカラを蒔く

O 10日 橋の補修作業

2009

2月

58号 子どものフィールド
あそびの世界

7月

60号 都留の自然財産

N 4月18日麦の土寄せ。昨年より育ちが良い。オカラの効果か

8月

56号 ゆったりずむ
都留リズム

N 7月2日麦刈り、ウメの収穫
8日田植え

3月

59号 点

N 1月25日下草刈り、剪定。数年前からクリが枯れ始める

47 号：「渡邊小屋」の前に池を作る

46 号　都留市の文化を支える人びと
11月

45 号　織物
10月
N　3 月下旬に小屋のある岸から対岸の泉までホースを設置し、9 月 29 日にホースから水を引く（上写真）

41 号　散歩 ～都留をもっとたのしもう！～
5月
N　5 月 12 日昨年から壊れたままになっていたイノシシ用の柵の補修

50 号 ①つる発、水だより ②5 周年、迎えました
6月
N　7 月 6 日「フィールド体験 B」の生徒 20 名ほどで田植えをおこなう

2007

51 号　都留、建物探訪。
7月
O　10 月 8 日橋の修理
小屋の掃除をおこなう

49 号　富士急行線 途中下車の旅
3月
St　文大前駅にビオトープができる
N　泉の整備をおこなう

47 号　沿線の記憶 ～富士急行線の今、昔～
12月
N　観察小屋の前に泉から引いた水で池を作る。12 月上旬から作業開始。広さは 3 × 4 m で深さ 20cm

48 号　都留でみつけた海の幸 ～イルカを食べるはなし～
1月
N　小屋前の池の底にシートを敷く。池のほぼ中央に浮島を作る。シートの上から土を盛って水を流し込んで池にする。池の底は平らにせず、場所によって水深を変える

42 号　桂川の小水力発電をたずねて
6月
N　6 月 2 日と 5 日に田植えと柵作りをおこなう
O　5 月 20 日清掃作業

43 号　RESTAURANT FIELD NOTE ～「美味しい本」へのいざない～
7月
N　炭焼き小屋のそばに積んでいた炭を納屋まで運び出す。4 人でバケツリレーをして渡邊さん作成の橋を渡る
一昨年に引き続き梅酒を作る

44 号 ①八朔祭 ②都留の水害史
9月
O　9 月 16、24 日小屋そうじ

中屋敷の移ろい

渡邊さんが田んぼをやっていたころ（左写真）と 2011 年 7 月の中屋敷のようす。渡邊宗男さんの妻、さとゑさんは今の中屋敷のようすを見て「木を伐ればいいのに」と言う。

69 号　春をたのしむ
6月
N　5 月 3 日麦の土寄せ

68 号　原点 「歩き、みて、きいて」広がる世界
3月
N　1月20日麦踏み、ウメの手入れ、草刈り

66 号　ものとつくり手のまわりには
9月
N　6 月 12 日苗床づくり
7 月 7 日田植え

63 号　跡
1月
N　11 月 12 日稲刈り。15 日に脱穀、麦蒔きをする。一部をサルに食べられる。30kg の米袋 2 袋分

62 号　手は語る
11月
N　9 月 3 日田んぼの草取り
O　8 月 3 日小屋そうじ

61 号　道
8月
N　7 月 10 日に麦刈りをして 14 日に唐箕（とうみ）かけをする。60kg とれた
6 月 6 日に苗床をつくり 7 月 14 日に田植えをする

2011　　2010

70 号　涼む 祝・9 周年！
8月

2011 年 7 月の「渡邊小屋」

67 号　材 ー素材を活かすー
1月
N　11 月 5 日に麦を蒔き、26 日にオカラを蒔く
4 日に稲刈りをし、14 日に脱穀をする。米袋 3 つ分

65 号　山と人
6月
N　5 月 8 日麦の土寄せ

64 号　縄 ーかさねるー
3月
N　12 月 16 日米の選別（唐箕かけ）
O　12 月 23 日小屋をそうじし、巣箱を外す。巣箱はかけて 3 年目になるもの。ムササビの棲んでいた跡があった

中屋敷の田んぼ（右奥）と滝のようす。2011 年 7 月 31 日撮影

フィールド暦

7～8月に都留市で見られる生きものを紹介します。ここでは、地域のかたからの情報も掲載していますので、ぜひ、編集部までお寄せください。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真

メジロの巣　2011年7月6日　都留市十日市場
十日市場在住の清水貞一さんに鳥の巣があることを教えてもらい、観察に行きました。すると、ウメモドキにメジロの巣があり、親鳥が抱卵中でした。清水さんによると、7月20日ごろにヒナが巣立ったそうです。

セミの鳴き声の初認時期

都留市内でのセミの初鳴き情報です

・ニイニイゼミ	7月 5日	都留市田原
・ヒグラシ	7月 8日	都留市十日市場
・アブラゼミ	7月22日	都留市田原
・ミンミンゼミ	8月 4日	都留市井倉

ヒバカリ　2011年7月6日　都留市十日市場
夜、ヒバカリの成蛇（せいだ）を見つけました。おもに早朝や夕方に活動するヘビです。

オオムラサキ　2011年7月14日　都留市田原
今年は大学キャンパスでオオムラサキがよく飛んでおり、少なくとも3頭を確認しました。

サワグルミの実　2011年7月17日　都留市鹿留
細長く垂れ下がっているのが、サワグルミの実です。市内では標高600mほどの沢沿いで見られます。

クサギの花　2011年8月4日　都留市井倉
夏に白い花を咲かせます。名前の由来は、葉や枝をちぎったときに臭気がすることによります。

センサーカメラが写した動物たち

中屋敷フィールドでは、赤外線のセンサーカメラを設置して動物の調査をしています。下の写真は、2011 年 5 ～ 7 月に撮影された動物たちです。

キツネ　2011 年 6 月 4 日
このところ、しばらく確認されていませんでしたが、久しぶりにキツネが写りました。

キクガシラコウモリ　2011 年 5 月 3 日
キクガシラコウモリはこの洞窟で、年間を通して撮影されています。

ニホンジカ　2011 年 6 月 13 日
近年、都留市でもニホンジカは増加しているようで、山では声も耳にします。

ハクビシン　2011 年 6 月 13 日
春から秋にはよく写りますが、冬には生息していないようです。

ニホンザル　2011 年 7 月 6 日
今年はニホンザルが少なく、群れの数も少ない傾向にあります。

イノシシ　2011 年 6 月 19 日
夏になり、フィールドではイノシシが土を掘った跡をよく見かけます。

大桑山だより
OHKUWAYAMA NEWS LETTER

うら山図鑑　第11弾
「両生類」

両生類は卵と生まれてからしばらくは水のなかで、大人になると陸で生活する動物です。水と陸と両方で生活するので「両生類」といいます。今から3億5千万年ほど前に最初に陸地に進出した動物で、そのとき獲得したものを私たちも引き継いでいます。たとえば、4本の手足、声を出す仕組み、音を聞く鼓膜、動かせる首、まぶたなどです。

両生類は今ではどんどん減っていて、世界に3000種類ほどしかいません。地球温暖化や紫外線、カエルツボカビ病などで将来絶滅するおそれがあるなかまです。日本には60種類ほどいて、山梨県には14種類、都留市では10種類（9種類のカエルと1種類のサンショウウオ）が確認されています。おもなものを紹介します。

ニホンアマガエル

田んぼに水が入ると合唱が聞こえるようになります。近づいて観察すると、のどを大きく膨らませて、声を出しているようすが観察できます。田んぼにいるのは繁殖期の夜だけで、普段は草むらや樹上にいます。

カジカガエル

沢にすみ、きれいな声で鳴きます。石の上によくいるのですが、模様が石のようで、見つけにくいカエルです。

トノサマガエル

田んぼのそばで見かけるカエル。背中を通っている1本の緑の線が特徴です。

シュレーゲルアオガエル

声はすれども姿はなかなか見えないカエルです。泡状の卵を、岸辺または土のなかに産みます。

タゴガエル

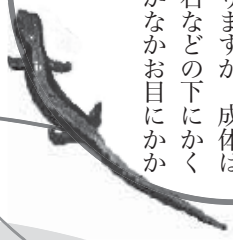
沢の石の下など、鳴き声がするところを探してみるとこのカエルが見つかります。卵は白く大きな粒で、生まれたオタマジャクシも白色です。ヤマアカガエルと似ていますが、水かきやのどの模様で識別できます。

アズマヒキガエル

山で見かける大きなカエル。春、きまった水場に集団で産卵します。ひも状の大量の卵は、しばらくして大量のミニガエルになり、一斉に山に散らばっていきます。そのほとんどがほかの動物たちに捕食されることで、生態系を支えています。

ハコネサンショウウオ

きれいな沢にすんでいます。幼体は比較的よく見つかりますが、成体は夜行性で、昼間は石などの下にかくれているため、なかなかお目にかかれません。



ヤマアカガエル

山で見かける中型のカエル。ヒキガエルと違いジャンプ力があります。地面や落ち葉の模様に同化するので、見つけることは難しいです。春、山中の池や、川の水たまりなどに産卵します。

都留ではこのほかに、ナガレタゴガエル、ツチガエルも確認されています。

両生類は、陸上生活に必要なさまざまなもの（手足、声帯、まぶた、動く首、鼓膜……）を獲得してくれた偉大なご先祖様。キライなんて言わないで、よく観察してみよう!!

小口尚良（東桂小学校教諭）＝文・写真

Field・Note News 2011.06~07

01 苗床づくり

6月13日、十日市場にある渡邊宗男（わたなべむねお）さん（81）の畑で、イネの苗床づくりをおこないました。宗男さんは「毎年初心者だ」といいます。私は一昨年も参加したのですが、新しい専用の道具が増えていました。種籾（たねもみ）は水に2、3日ひやかして（浸けて）芽だししたものを使います。昔は育ちすぎた苗の頭を馬が食べてしまったこともあったとか。また、そのおかげでちょうどよく育ったのだとも。おもしろいお話を聞くことができ楽しいひとときでした。（香西恵）

2011.6.13

02 麦のネット張り

2011.6.23

6月23日、育てている麦にネットをかけました。スズメやイノシシなど、野生動物に麦を食べられないようにするための防護ネットです。私自身は気づきませんでしたが、今年はスズメの数が少ないという話を聞きました。脱穀はまだおこなっていませんが（8月1日現在）、麦刈りをした時点ではほとんど食べられていないように見えました。（石川あすか）

03 イラクサ採り

麦畑にネットを張った後、中屋敷フィールドに向かう道に生えているイラクサの若い葉を採りました。イラクサは全体にトゲがあり、素手で触るとそれが刺さるため、軍手をはめて慎重に採ります。採ったイラクサは、都留市中央にあるイタリア料理店「Buono」にお届けしました。「Buono」ではこのイラクサを使用した「カネデルリ」という料理があります。調理後はトゲがしなしなになり、食べても刺さることはありません。ぜひ、地域の食材を使った「カネデルリ」をご賞味ください。（西教生）

2011.6.23

特集
中屋敷スペシャル

夏が近づくにつれ、暑さとともに街が活気づいているのを感じます。田畑も今が一番忙しい季節。中屋敷フィールドでは、麦と稲を二毛作で育てています。そこで今回は、「中屋敷スペシャル」と題して中屋敷での私たちの活動のようすをお届けします。

フィールド・ノート編集部＝文・写真

04 梅の収穫と梅酒・梅シロップづくり

仕込んだばかりの梅酒　2011.6.24

6月23日、強い日差しが照りつけるなか、梅を収穫しました。ちょうどよい具合に梅の木の横にある観察小屋の屋根に上り、かたくて青い梅の実を一粒ずつもいでいきます。香りはなく、赤い斑点のあるものもありました。一本の梅の木から、全部で約2kg採れました。

アクを抜くために水につけておいた梅は、翌日には黄味がかった斑模様になり、甘い香りがしていました。ていねいになり口をとり、ホワイトリカーと氷砂糖につけて梅酒を、砂糖に埋めて梅シロップを、それぞれ仕込みました。梅シロップは3週間ほどで完成。梅酒は、まだまだ熟成中です。これからどんな味になっていくのか、日々見守っています。（香西恵）

05 麦刈り

7月5日、麦刈りをおこないました。よく晴れて暑いなか、宗男さんが来て下さり、刈る時のコツや鎌の持ちかた、また収穫後には束ねるときに用いるわらの縄の作りかたを教わりながらの作業となりました。強い日差しのもと、休憩をはさみながら。4時間ほどかけて全作業を終えることができました。種を蒔いてから数ヶ月間、定期的に手入れをおこなって無事豊かに実った麦が、今度は小麦粉になるのがとても楽しみです。（平井のぞ実）

2011.7.5

06 田植え

2011.7.8

7月8日、田んぼで田植えをしました。宗男さんが事前にひいてくださった格子状の線に合わせて、2・3本ずつ苗を植えていきます。小さな田んぼに対して総勢5人で行ったのですが意外に時間がかかってしまいました。泥に足を取られながらも自分の手で一つひとつ植えた苗。これから少しずつ大きくなって、秋には美味しいご飯になってくれることを今から楽しみに世話をしていきたいです。（持田睦乃）

大学周辺イベント

初夏の観察会

6月18日、本学地域交流研究センター、フィールド・ミュージアム部門主催の観察会「初夏の山を歩こう」がおこなわれました。参加者9名、スタッフ9名の計18名です。梅雨の真っただ中でしたが、雨で中止になることなく観察会を終えることができました。

都留文科大学前駅を9時過ぎに出発し、キャンパスの裏山を歩く行程で、学生が見られる生きものたちを紹介します。私はセイヨウタンポポやビロードモウズイカなど7つの植物を紹介しました。予定していたもの以外にもさまざまな生きものが見つかります。ある男の子は植物よりも地面にいたテントウムシやカタツムリに興味津々で、大人の目線との違いを感じました。参加者とスタッフがそうした発見を共有しながら観察ができたと思います。この経験を生かして次回はもっと楽しんでいただける観察会をつくっていきたいです。

（初等教育学科3年　砂田真宏）

2011.6.18

夏の観察会

2011.7.16

7月16日、観察会「夏の森を歩こう」が開催されました。参加者6名、スタッフ8名の計14名で、朝8時に都留文科大学前駅を出発し、2～3時間かけて楽山公園など本学周辺の森を歩きながら、スタッフによる自然観察をしました。学生スタッフは事前に調べてきた生きものに関する豆知識の紹介や、パネルを使ったクイズなど、さまざまな方法で生きもの紹介をしていきます。偶然私が紹介したヤマホタルブクロに、ニイニイゼミの脱け殻がくっついているなど、夏の訪れをそこかしこに感じた観察会でした。参加者の方もスタッフも一緒になって楽しみながら歩くことができました。　（持田睦乃）

Field･Note News

ビオトープ

7月22日に図書館横のビオトープの手入れをしました。今年は一週間に一度ていど作業をおこなっています。この日は、草刈りを中心に作業を進めました。すると、6月に苗を植えたコスモスには赤い花が咲き、ヤマユリの甘い匂いが漂っていました。また、紫色をしたブッドレアの花では、アゲハチョウが蜜を吸っているようすも見られました。身近なところで植物が確実に命を育んでいることを改めて実感できました。（崎田史浩）

2011.7.22

オープンキャンパス

2011.7.23

7月23日、本学のオープンキャンパスが実施され、『フィールド・ノート』の編集部員がキャンパスツアーのガイドを務めました。大学内を一周しながら、豆知識も交えて施設の説明をしていきます。高校生や保護者の方々は大学の環境に興味津々で、何度か「へえー」という声もありました。真剣なまなざしをしている皆さんを前に、私たちガイドも説明する声に熱が入りました。（前澤志依）

駅の展示替え

7月27日、一ヶ月に一度の富士急行線 都留文科大学前駅の展示替えをおこないました。今回の展示のメインは、『地域交流研究Ⅱ』の授業でおこなった、身近な生きものを対象とした分布調査の結果です。タンポポ、ウマノアシガタ、スミレ類、アオキ、シュロの5つを対象に、10グループの調査結果をパネルにしています。駅にお立ち寄りのさいは、ぜひご覧ください。（大澤かおり）

2011.7.27

FIELD NOTE

no.70 Aug.

発行人
北垣憲仁〔22-23,38-39〕
統括編集者
西教生〔20-21,38-39〕
編集長
石川あすか〔1,18-19,32-37,46,48〕
副編集長
香西恵〔4-5,24-25,46〕
牛丸景太〔2-3,14-15〕
前澤志依〔30-31,46-47〕
編集
狩野慶〔32-33〕
磯ちづる〔44-45〕
大澤かおり〔42-45〕
北村彩乃
崎田史浩〔10-11〕
反保智栄〔26-27〕
平井のぞ実〔16-17〕
藤森美紀〔12-13〕
持田睦乃〔6-9,40-41,46〕
岩佐志保〔28-29〕
木村元美
ロゴデザイン
工藤真純
〔　〕は編集担当ページ

裏表紙写真：石川あすか

編集後記
夏のたのしみ

スゥーっと、スイスイと、なめらかに、道のカタチをたどるように走る。これが最近とてもたのしい。今年の春からビュンビュンと車を走らせる日々が続く。長き旅を共にする我が相棒は頼もしいけれど、ときどき調子が悪いのかな？　と心配になることがある。「愛車」の「愛」とはこういうことか、と思った。車窓を開け放して下り坂を駆け下りる。それが暑い日のたのしみになっている。　（石川あすか）

イカとジャガイモの煮物が食べたくなる。暑い日がつづいてバテ気味のとき、イカのワタで煮た、濃い味のしみこんだこれを食べると元気がでる。都留に来て畑を始めてから、毎年新じゃがが収穫できるのを待ってつくるようになった。つくろうと思えば年中できるのだけど、年に数回、この時期につくるのが格別だ。今年も夏の味わいをたっぷりたのしみたい。

（香西恵）

カが飛び交う季節になりました。夜中に耳元まで近寄られると聞き苦しくて寝ていられないほどです。そんなときには、やっぱり蚊取り線香が大活躍。あの独特な香りと煙で、蚊を追い払います。私にとって夏をたのしむための大事なお供の蚊取り線香。今年の夏も、幾度となくお世話になることでしょう。

（持田睦乃）

FIELD･NOTE（フィールド・ノート）
発行日：2011年8月31日
発行部数：400部
発行・編集：
〒402-8555
山梨県都留市田原3-8-1
都留文科大学
コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート』編集部
E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

「記憶」を集めています

読者のみなさんが都留で見たこと、経験したことの記憶を集めています。いつごろ、都留のどのあたりで、どんなことをしたかをひとまとまりの「記憶」とし、本誌で紹介していく予定です。また、差し支えなければご年齢も教えていただきたいと考えています。「記憶」を寄せていただける場合、本誌編集部へ直接お越しいただくか、電子メールもしくは郵送にてお送りください。みなさんのご協力をお待ちしています！

（例）

だれに聞いた	都留市在住の山田さん（年齢）
どこのこと	金山神社付近
いつのこと	昭和30年ころ
どんなこと	冬に田んぼの水をひいて凍らせて遊んだ

©2011『フィールド・ノート』編集部　乱丁・落丁の場合はお取り替え致します。編集部までお知らせください。

取

撮

穫

採

次回予告

とる（仮）

2011 年 11 月発行予定

FIELD·NOTE

発行日 2011年8月31日（年4回発行）
発行所 〒402-8555　山梨県都留市田原3-8-1　都留文科大学　コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター　フィールド・ミュージアム部門　『フィールド・ノート』　編集部